愛知県安城市小川町

よせじまいせき
寄島遺跡

発掘調査地元説明会資料

2011 年 8 月 20 日（土）

調査主体：公益財団　愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

調査支援：株式会社ユニオン

よせじまいせき 寄島遺跡 その１ 寄島遺跡の構成がわかってきました

寄島遺跡は、弥生時代末から古墳時代初めにかけての集落遺跡です。２回の発掘調査で、その構成がみえてきました。

集落エリア

竪穴建物を住居とする、日常の居住エリアです。沖積地にできた微高地を中心に、おそらく半径約 100m の円内におさまる大きさであったと推定されます。多数の竪穴建物跡が検出されていますが、同時に建っていたのは 5〜10 棟くらいだったと考えられます。

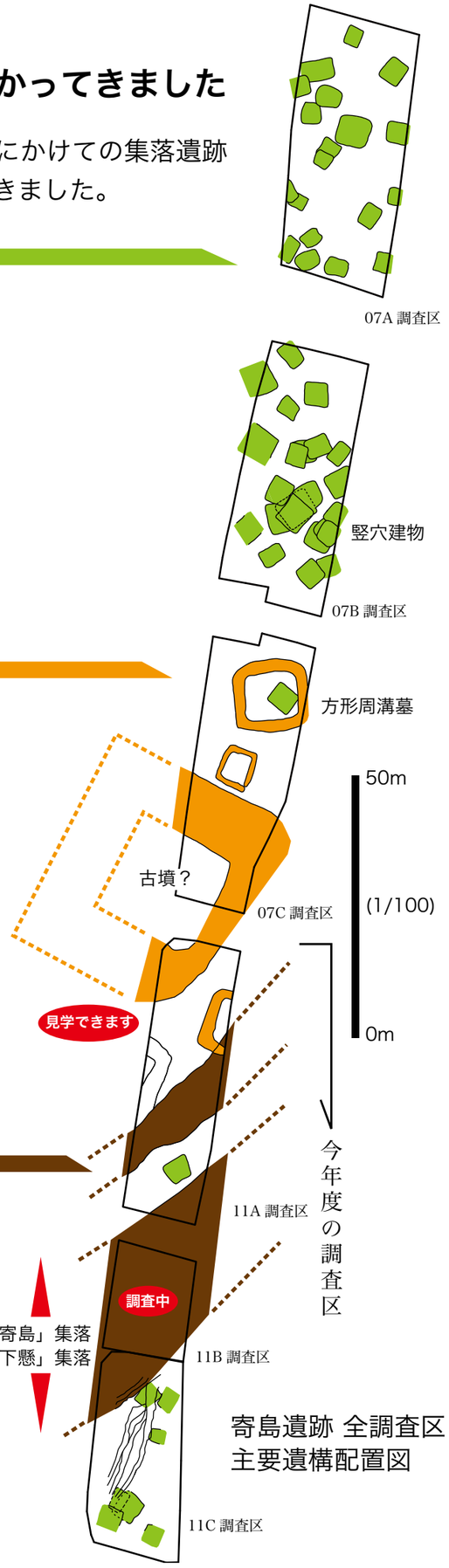
墓のエリア

一辺が約 5〜9m の方形周溝墓が３基検出されている他、一辺約 20m の方墳または前方後方墳と考えられる古墳１基の周溝部分が検出されています。古墳の墳丘や埋葬施設は削られており不明ですが、集落の首長が埋葬されたものと考えられます。遺跡周辺の台地上では多数の古墳が存在していますが、それらと同じ頃につくられたものと思われます。

集落の境界

川の跡を検出しました。正確には、川の水量が減少してよどみになったところが湿地化し流木などがたまった部分です。

ここから南側は下懸遺跡で検出された集落の様相に一変します。つまり集落どうしの境界線のような場所であったと考えられるのです。



寄島遺跡 全調査区
主要遺構配置図

よせじまいせき 寄島遺跡 その２ 竪穴建物を検出しました

寄島遺跡では２回の発掘調査で計 40 棟以上の竪穴建物が検出されました。その多くは一辺が 4〜5m の標準的な大きさです。

11A 区で検出された竪穴建物跡です。床面には、４本の柱を立てた穴があります。焼けた柱根がわずかに残っていて、その直径は 8cm です。

焼けた木質の破片は床面でも多くみられたことから、建物解体時に不要になった部材を焼却したのかもしれません。▶

11A 区 021SI（南から）

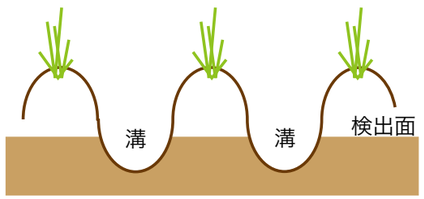
11C 区で検出された竪穴建物跡です。今回調査した建物では、竈や炉の遺構は検出されていません。煮炊きをした甕は多数出土しているので、どこで調理をしていたのかは興味のあるところです。

なお、細長い十字の溝は、土層を確認するためのトレンチです。▶

11C 区 127SI（南から）

竪穴建物の周囲では、幅約 50cm の細長い溝が何本も並んで検出されました。耕作の時に畝をつくった痕跡と考えられます。

畝溝が分布しているのは 11A 区の、川の跡（湿地）です。竪穴建物は砂地の少し高い所につくり、比較的浅い湿地は畑として利用していたと考えられます。▶



11A 区 062SD・063SD（南から）

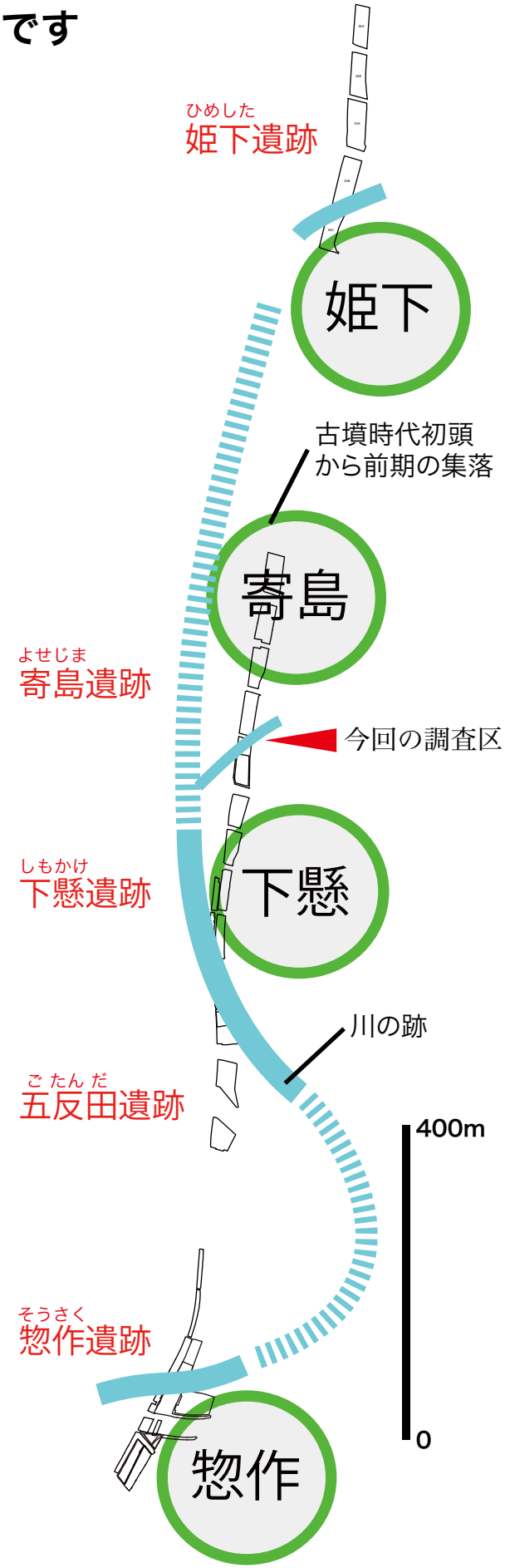
その３ 川の跡は文化財の宝庫です

11B 区・11C 区 川の跡出土土器（廻間Ⅰ式後半）

川の跡は、黒色の粘土に流木や湿地の草などの植物が多く混じったドロドロで深い堆積です。しかしそのおかげで、捨てられた土器だけでなく木製品や時には文字の記された木簡が腐らずに出土するのです。

それではなぜ、川の水量が減って湿地化が進んだのでしょうか？自然に川の本流が変わったからでしょうか？それとも上流部での農耕で大量に水が消費されたからでしょうか？ともあれ寄島遺跡をはじめとする沖積地上集落の大半は、古墳時代始初頭に栄えた後、古墳時代前期には終わってしまいます。次に集落地になるのは奈良・平安～鎌倉時代なのです。

下懸遺跡で検出された川の跡（平成 21 年度）



川の跡と集落遺跡の概要図（1/8,000）